

# ミステリ読書案内

2023. 4. 3 発行元

第463号 伊藤 剛

<https://mystery-dokuan.com>

## 芦辺拓「大鞠家殺人事件」

2021年10月に東京創元社から出た芦辺拓の『大鞠家殺人事件』を取り上げる。『このミステリーがすごい!』年間ランキング第8位に入る出来である。戦中の大阪の商家を舞台にした連続殺人事件の行方。

### 純粋な「本格もの」のつくり

芦辺拓はいろいろな作風を持つ作家で、SFミステリ、パロディ、パステイシュ、ジュニアもの…と幅広い作品を作り出している。この『大鞠家殺人事件』は、『ミステリーズ!』に連載したということもあって、伝統を踏まえた「本格もの」に仕上がっている。森江春策シリーズとは違った真面目な雰囲気。

「大鞠家」は明治時代から続く小間物屋、婦人化粧品を扱う大店。大阪・船場に店を構えている。作者は明治、大正、昭和の大阪の有り様を細かなところまで調べ、丁寧な描写を心がけている。時として、筋道から外れた部分まで書き込んでしまう傾向がないわけではないが…。

### 発端は明治時代の行方不明

プロローグに出てくるのは明治39年の難波停車場前のパノラマ館。日露戦争の旅順総攻撃の展示を見に行ったはずの大鞠家長男・千太郎が行方不明になってしまう事件。これは未解決のまま過ぎてしまう。

中心になるのは昭和19～20年にかけての太平洋戦争末期の時期。この時期の長男・多一郎は軍医となつて大陸に、次男の茂彦は南方に出征してしまう。大鞠家に残っているのは、女性たちと雇い人だけになっている。話が進む中で物語の中心は多一郎の嫁として嫁いできた美禰子になっていく。

最初の事件は長女・月子の部屋で見せ掛けの作られた現場があったり、夜中に登場する赤い髪をした小鬼が登場したり…。警察の捜査も戦時中と思うように進まず、途中で探偵と名乗る人物も現れてますます混乱に陥っていくような…。

### B29による大阪空襲

物語の背景にあるのは戦時中だということ。最後の事件が起きた直後に大阪空襲が始まり、関係者は必死に逃げ惑うことになっていく。自分の命を守ることもさえない状態に追い込まれ、大鞠百貨館も炎の中に崩れ去っていく。

戦時の状況を描きたかったのも作者の気持ちの現れだと感じてい

### 「好事家のためのノート」

芦辺作品の巻末には「好事家のためのノート」という「あとがき」が付いていることが多い。古今の作品を数多く読みこなしており、独自の研究を深めているようにも見える。本書でも、戦前の日本ミステリ、翻訳ミステリの状況を詳しく述べている。そういう意味でも勉強になることが多い。

る。連載が終わり、本が出版された後に現実の世の中ではロシアによるウクライナ侵攻が始まり、何か予言のようなものさえ感じてしまう。平和であることの大切さはミステリの形を取りながらも訴えることは可能なのだ。

### ヴァン・ダインなどが下敷きに

大鞠家の次男・茂彦は大の探偵小説好きで、フィルボツ、クリステイ、クロフツ、クイーン、大阪圭吉、蒼井雄、多々羅四郎…などと名前が出てくる。最後まで読むとヴァン・ダインの作品が下敷きになっているらしいことも明らかになってくる。読んでいる途中ではそんなことは思いもしないことだけれども、芦辺作品ではよくあること。過去の名作を出発点にして応用編を作っていくことが得意な人だから。黄金期作品を読んでおくにより楽しめる。

### 大山誠一郎「仮面幻双曲」

2006年小学館。『アルファベット・パズラーズ』

に続く著作2冊目に当たる。なかなか本が見つけれられずにいた。ようやく読むことができた。大山誠一郎は短編が多いのだが、本書は長編。「本格ものミステリ」のオーソドックスな形に従っている。舞台は昭和22年で戦後すぐの時代になっているものの、特別この設定でなければ駄目という程ではない。冒頭のプロローグで「双子」であることと、整形をして犯行の準備に入るところまでが説明されている。

本編に入って最初に登場してくるのが東京から北陸線のK駅までやってきた私立探偵の川宮圭介と奈緒子の兄妹。琵琶湖畔の双竜町に居を構える占部文彦なる人物から身辺警護の依頼があったためである。文彦は戦争から復員した後、双子の弟とともにこの町で製糸工場を営んでいた伯父の招きでこの地で暮らすようになり、伯父が急死した後社長に就くことになった。その後専務となっていた弟にひとつの出来事から恨みをかうことになり、弟は家から飛び出してしまったのだという。文彦の居室の前で交代で警護に当たったのだが、次の日の朝に文彦はナイフで刺殺されて発見された。窓が開いていたので密室というわけではない。面目を潰された形の川宮探偵は犯人を見つけるための捜査を開始する。「双子」の設定に仕掛けがあるのだ…が…。